

【佳作】

黄色い手袋と黒い糸

松岡智恵子・長野県

古びたものを新しいものへと替えていくのは、日常よく見る光景である。だが古びたものには、替えの利かない良さもある。それは「思い出」が詰まっているからだ。

先年私が妹の運転でランチに行つた時のことだ。その日はまだ十月だというのにとても寒い日だった。夫の定年を機に故郷に戻るまで暖かい地域で過ごした私は、信州の寒さをすっかり忘れていた。今日行くレストランも駐車場から結構歩くことを知っていたはずが、軽装で来てしまった。

私は道中「寒い、寒い」と連呼していると妹が、

「しようがないな。手袋片方貸してあげる」

自分が持つていた毛糸の手袋を片方貸してくれた。お礼を言いつつ借りると、それはすぐい手袋だった。

手袋は防寒のため手首のところで少し絞まるものが多い。だがその手袋は入れ口のゴムが切れていたせいか、五本指を広げたサイズのまま寸胴に伸び切っていた。しかも入れ口の毛糸のほつれを、黒い木綿糸でザクザクと縫つてある。多分買った当初は美しい黄色だったと思うが今では大分煤けており、さらに黒糸の粗い目が目立つ。私は、

「年季の入った手袋だね」

と軽口を叩きながら手袋をはめると、存外モコモコしていて暖かかった。

私はその手袋の暖かさに救われたというのに、店を出るころには手袋の存在をすっかり忘れていた。手袋が無いことに気が付いたのは、帰りの車中だった。

私は手袋をレストランの椅子の上に置き忘れてきたことを思い出したが、どこかで新しいものを買つて返せば事は済むだろうと考えていた。

運転中の妹に忘れてきたことを謝りながら、

「あの手袋くたびれていたから、お詫びに新しいのを買つてあげるよ」と話しかけた。これから引き返すのも面倒だし、新しい手袋が手に入るのだから妹にとつても悪い話ではないはずだと勝手に思い込んでいた。

だが妹は、

「え！ そんなの、ダメだよ」

と車を脇に止めた。

「お姉ちゃん、早くレストランに電話して。取りに戻るから」と譲らない。仕方ないのでレストランに連絡すると、きちんと保管してくれていた。急ぎ

戻り店員さんから受け取るときに、手袋がますますぼろぼろく見え恥ずかしかった。

車の中で待っていた妹は、それまでの機嫌斜めも少しは収まったようで、

「その手袋覚えていない？お姉ちゃんがお母ちゃんに買ってくれたのだよ。だから形見」と言い出した。

寝つきだつた母が七十五歳で逝つて久しい。母は病むまで地域の役員を買ってでもしたい、元気な人だつた。近所の独居老人宅への給食ボランティアは大雪が降つても配達をがんばつていた。

そんな母が、

「手が冷たいんだよね。暖かい手袋が欲しい」

私の顔をみては訴えるのでプレゼントしたのが、その手袋だつた。しかしそれは随分前で、十数年以上は経つだろう。贈つた私でさえすっかり忘れるほど昔のことだ。

母は私の贈つた手袋を妙に気に入つてくれていたようで、手袋の入れ口がほつれても買ひ替えることも無く繕つた。母は裁縫が苦手な上に老眼で見えにくくなつたせいか、手袋と同系色でなく黒い木綿糸が縫い易かつたと言う。だから黄色い手袋に黒い糸だつたのだ。

その後母は脳梗塞を患うと、今度はデイサービスに通うときにその手袋を使用した。後遺症で両手にマヒが残つてしまつたせいか、手袋の入れ口が大きく伸び切つていた方が介護する者にははめ易かつた。さらに病状が悪化し寝つきだつた。ベッドの中できえ冷たいままの両手にはめていた。手袋はますますほつれ、今度は妹が似たような黒糸で繕つてずっと使い続けていたのだ。

母はその手袋を「ぬくい、ぬくい」と心筋梗塞で逝くまで愛用してくれていた。私も信州に戻つてからは介護を手伝つていたのだが、不覚にもその手袋に気づかなかつた。ましてそんなんに大切してくれていたとは、夢にも思つていなかつた。

私が手袋の片方を返すと、妹は両方揃えボケットにしまいながら、「この手袋見るとお母ちゃんを思い出すんだ」

ちよつと照れたように笑つた。私は、

「それにしてもぼろぼろの手袋だね」

と鼻の奥がツンとなつたことを隠すように、憎まれ口を叩いた。